IS 使徒転生

伯爵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　使徒転生

【Ｎコード】
Ｎ５３６８Ｔ

【作者名】
伯爵

【あらすじ】
使徒。人と９９．８９％遺伝子が酷似しながら、人とはあまりにも異なる生命。
ＩＳ。世界を破壊することができる兵器。
天使と悪魔が再び交差し――
「もすもすひねもす」
――この言葉を境に、物語は始まる。

プロローグ　上（前書き）

あらすじを見てここに来た方、どうか、期待などせぬようｗｗ

では、使徒転生――始まります。

プロローグ　上

「もすもすひねもす～。聞こえるかな？私が天才の束さんだよ、はろー」

――この俺、渚歪雲は猛烈に、どうしようもなく後悔していた。

――二日前。

今日も学校楽しみだなぁ！と言ってみるも、そんな訳はなく、ジリジリガリガリと気力を削る太陽の下、俺は登校していた。

「帰りたい、早く帰りたい、即急に帰りたい。」

愚痴をこぼしたその時、どこからともなく声が聞こえた。

「願うなら、帰してあげよう、ホトトギス。」

幼い声。

最後の音が聞こえるか否かというタイミングで、俺の意識はどこかに引っ張られる感覚と共にブラックアウトした。

起きると真っ白な空間に居た。ふむ、これは、あれだな。所謂テンプレというやつか。そろそろ神様とやらが謝りに…

「キラッ☆」

▼幼女が飛び出してきた！

テロップが頭に流れる。

「イラッ☆」

「あっはっは～☆実は君をちゃっかりうっかり殺しちゃったんだぜ！だぜ！」

野生（偽）の幼女は謝るどころかかなりのテンションでそう宣った。

「謝れこの駄神が。」

「いやぁ、すまんねワトソンくん。」

「謝る気ねぇだろオメェ。どうしてこうなった。」

「神は自分の思考を現実にすることができるんだよ。君が「帰りたい」って言ってるのをたまたま見つけちゃってね？最初は家に帰そうと思ってたんだよ？なのに若本さんがＤＵＳＴｔｏＤＵＳＴ塵に

還れ！とか言うから…。」

はぁーあ。と溜め息を吐く幼女。

「人の人生台無しにしやがってこんちくせう。」

「ＨＡＨＡＨＡ☆私の手違いで不幸な人生を送っていた君の人生がこれ以上どうなるというのかね？」

「ハハハ、それもそうだ。両親も居ない、学校でも虐められ…ってちょっと待て。そっからお前かよ！」

俺の人生が仕組まれていただと！？

ダメだ。もう死ぬしかないお…。

あ、いや死んでるか。

「君には世界を救うために転生して欲しいんだよー。その世界には何らかの異端（イレギュラー）がいてねー。簡単な話、それの殲滅かな。」

「ふむ。それ相応の能力は与えてくれるのだろうな？」

「フッ…。安心したまえ、その為のネルｈ…げふん。神だ。」

「此方で選ぶことは可能か？」

「なんでもアリだ！さぁ来い。どんと来い！」

ならば話は早い、ここで発揮せずしてなにが厨ニ病だ。

「じゃあ、エヴァ作中に出てくるエヴァ・使徒の能力、武装、現象

を自由に使えること。身体能力のサイヤ人化。不老不死。高速移動を頼む。」

「これだけ？」

「ゑ？」

「いや、身体能力哀川潤並～とか、もっとすごいの予想してたよ～。」

ダメだコイツ…早くなんとかしないと。

「じゃ、早速その世界へレッツゴー☆」

「おい、どんな世界に送るん――」

問おうとしたものの、足元にスキマと思わしき物が開いた。

――一日前

目を覚ますと俺は――目の前に地球が見える――月面にいた。某有名小説もビックリな展開だ。

……いやいやいや！何故生きてる、俺！ここ月面だぞ！無酸素だぞ！よく見れば肌も髪も真っ白。

ん？月面？アルビノ？…そうか、カヲルと同じ展開か。

「どーしよっかなぁ。」

…単身で大気圏突入しかねぇよな。Ｎｏ．６も無いし。
地球に行くにあたり、名前を決めよう。カヲル君がオワリのシ者なら、俺はハジメのシ者ってところかな。
なら簡単だ。渚歪雲（ナギサ ヒズモ）と名乗ろう。

――今日

今俺は大気圏へと突入しようと地球に近づいている。ここは使徒スペック。無酸素、太陽からの有害物質、なんのその。

「さて、行くか。」

何故か置いてあったプラグスーツ。取説には、太陽に突っ込んでも大丈夫！神様印の洋服店！と書いてあったので大丈夫だろう。
ダメだとしても素っ裸で地球に落ちるだけだ。

お。これが重力…かッ！？不味い、速度がありすぎる。俺の落下によって海水が蒸発！水位が低下！温暖化対策！

…笑えねぇ。

「Ａ．Ｔ．フィールド全開！」

空気抵抗を増すのにはもってこいだ。

あ、衛星巻き込んじゃった。テヘッ☆

速度が下がり、ほっとしたとき、俺は真横に大きなにんじんを見た。

「もすもすひねもす」

プロローグ　上（後書き）

あらすじィ？粗いからこそあらすじだ！異論は認めん！

作者、受験生につき、亀更新。

プロローグ　下（前書き）

執筆〜。みじけぇかな？今日は二回投稿するかもしれん。

じゃ、どうぞ〜

プロローグ　下

「はろー。聞こえてるかな？…うーん。まいねーむいず、たばねしのの〜！」

おい、幼女、嘘だろう。俺にこの女尊男卑の世界で、主人公がハーレムを築くのを横で見てろと？

「ああ、すまん。ちょっと待て。」

俺の横にあるにんじん（の中身は）篠ノ之束。
←
束と言ったらＩＳの産みの親。
←
男性用も作れる。
←
俺の専用機！

「すまなかったね、レディ。無礼を詫びよう。物は相談なんだが、ＩＳを――」

「君、ＩＳのこと知ってるの？！まだ発表もしてないのに！ますます興味がわいてきたよ☆」

しくじった！

束の胸の大きさからしててっきり原作開始していると思ったのだが…。なんたる不覚ッ！

…まてよ？発表していない？白騎士事件前か！

幼くしてこの胸とは。アニメのおっぱいキャラは化け物か！？

「ねぇねぇ、私のところに来ない～？」

不味い、これは研究対象として、の話だ。

ならば…

「条件がある。」

「むむ、なにかな？」

「お前が俺を研究するのは構わん。」

どうせ遺伝子程度しかわからねぇしな！

「えへへ、ばれちゃってたかぁ。」

「その代わり、俺を不可視型ＩＳの試験搭乗者として発表しろ。細かいことは任せる。」

俺って生身の方が強くね？うん。専用機も欲しいけど無し無し。

「うーん。そのくらいならいいかなぁ。じゃあ、名前おしえてよ！」

「渚歪雲だ。」

「よろしくね！ひーちゃん。」

「こちらこそ、篠ノ之博士。」

交渉成立。いや、ここは計画通り（ニヤ）か？
まあいい、原作介入はこれで大丈夫だ。

「固いよひーちゃん。束って呼ばないとだめだよ？」

「はぃよ。よろしく束」

だが、俺は忘れていた。天才は正しく天災であることを。

プロローグ　下（後書き）

白騎士事件は書くつもりだが、そっから原作開始までキンクリするかもｗｗ

感想、意見があったら是非！

第一話（前書き）

小説を一日に何ページも更新する人はすげぇな。俺だと短くなっちまうなぁ…。

じゃ、どうぞ～

第一話

「それでね～、ここが…」

「ふむ…。」

今、かの有名なＩＳ、白騎士についてちーちゃんが説明を受けている。そろそろ白騎士事件かねぇ。
俺がここに来て２ヶ月。あの戦闘民族織斑家の皆さんと篠ノ之家を通じて接触した。一夏や千冬、箒に会ったが、アニメと変わらない、美男美女でしたね、ハイ。

「ひーちゃ～ん。テスト始めるよー！」

テスト。というのは勿論白騎士のテストなのだが、攻撃対象として、的が必要だ。
もうわかっただろう、それが俺だ。Ａ．Ｔ．フィールドを展開しながら適当に逃げ回るだけなんだが、まさに鬼神のような形相のちーちゃんが追ってくるのは精神的にクる。

「歪雲、早く来い。」

ちーちゃん殺る気満々だね！

「Ａ．Ｔ．フィールド、展開。」

勿論控えめに。太平洋海上で全開にしてみたら海に穴が空いたぜ☆

…何考えてんだあの幼女。

「考え事とは、余裕だ、なッ！」

ゴォッ！と刀ではありえない音を発しながらちーちゃんが俺を切り裂かんとする。

脳内再生でちーちゃんの言葉が「私の事をちゃんと見て！」に変わる。

キモい？フッ…。キモくて結構！これぐらいせんとやってられん！

「ほんっと容赦ねェなあ。」

俺の頭上に光る輪が浮かび、瞬時に回避する。

「ひーちゃ～ん。ちょっと攻撃してもいいよ～！」

よしキタ！さっさと終わらせよう！正直もうちーちゃんが怖くて怖くて。

プログレッシブナイフ、装備。

「ッ！刀に対してナイフとは。嘗めるなッ」

「今んとここれぐらいしか、ねェんだよッ！と。」

首に向かってきた刀をいなし、蹴り飛ばす。

「クッ！これが束の言う、”ちーと”というやつか？」

スラスターを吹かし、体勢を立て直そうとしているちーちゃんにナイフを投擲。それを囮に使い、飛び蹴りを放つ。ＩＳのシールドに衝突、絶対防御が作動し、ＩＳのエネルギーが底をつく。

「勝負あり、だな？」

「っ！…歪雲、昼食を取ったら再戦だ！」

ちーちゃんが顔を赤らめながら言う。

あるぇ？フラグか？

第一話（後書き）

今回は、千冬フラグでしたｗｗ
それしか書けてないね！

第二話（前書き）

学校やっと終わった！修学旅行楽しみだ。

じゃ、どうぞ～

第二話

今日はＩＳをお偉いさんに発表しに行く。確か、相手にされなかったとか書いてあった気がしたが…。

「ひーちゃ～ん！行くよ？」

まあ言わなくてもいいかな。

束を抱え、地面を滑る様に移動する。

「むふふ～。」

「束、胸があたっているぞ。」

「当ててるんだよ☆欲情した？」

うむ。

そうこうしているうちにお偉いさんの居る国会議事堂についた。

なにか論文を発表するものだと思っていたのだが、やはり束に常識は通じないようだ。

受付の人に手続きをし、中に入る。

――前略――

お偉いさん「何それアリエンティーｗｗ」

――後略――

…再び俺は束を抱えて研究所（仮）に戻った。
中ではちーちゃんが白騎士の訓練をしていた。

「言ってだめなら、やってみせるしかないよね☆」

そんなことを呟いた束の手元のＰＣには、日本と世界各国を結ぶいくつもの線が表示されていた。

「おい、束。俺にはそれが各国の軍事施設から日本、国会議事堂へのミサイル攻撃の進路に見えるのだが。」

まさかな。こんな適当に白騎士事件が起こるはｚ

「すごいね！これを見ただけでわかるなんて、流石☆」

ＨＡＨＡＨＡ☆お前は天災だもんな！

「発☆射」

待てぇぇぇぇぇ！

「千冬！訓練中止、あがってこい。」

「はあ、どうしたんだ。そんなに慌てて。」

「これを見ろ、現在国会議事堂に向かっているミサイルだ。」

うん、もう光点というより光壁だね！

「なっ！総数１２３４１発だと！？」

そう。原作より１００００発多いのだ。通常の三倍なんて比じゃない。

どっから出てきたし。

「千冬、今からミサイルの迎撃を行う。最初俺が大方を片付ける。打ち漏らしは任せた。」

「おい、まっ――」

「時間がない、出るぞ。」

研究所（仮）を飛び出し、国会議事堂を目指す。

第二話（後書き）

いつにも増して短いね！まあ繋ぎだから…。
たぶん今日中にもう一話書くよ。

第三話（前書き）

三話目〜

じゃ、どうぞ〜

第三話

俺が国会議事堂上空に着くと、空に黒い帯が３６０。全方位に広がっていた。

「迎撃と言えば、第五使徒だ！」

自分の周りに頭位の大きさの第五使徒を１６個並べる。

お、ちーちゃんが来たようだ。

「歪雲！…と、なんだそれは。」

「ちーちゃん、高度下げて攻撃体勢に入ってて。」

説明するのは、後だ。ちーちゃんが下がったのを確認し、第五使徒の加粒子砲を放つ。

ビシュウッ！

さっと黒い帯をなぞるように放たれ、ミサイルが一斉に火を吹く。

「残弾約３０００…。よし、ちーちゃん、行って！」

後はシナリオ通り、千冬無双が展開された。

「たぁばぁねぇ？明日朝日が拝めると思うなよ？」

「夜通しヤるだなんて。ひーちゃんだ・い・た・ん☆」

「死ね。」

あのウサミミめ…。

「歪雲、終わったぞ。」

ちーちゃんが息を乱しながら帰ってきた。エロい。

「ひぃ、ふぅ、みぃ…。ふぅん。」

「？」

監視衛星が４つか。

加粒子砲で跡形もなく消し去る。

「…何かあったのか？」

「ああ、衛星を落としただけだよ。」

「見えるのか？」

「ああ。」

「……。」

ん、通信？らぶりぃたば……ブチッ！

「なにか――「なんでもない」

「はろー☆切っちゃうなんて酷いよひーちゃん！」

「「……。」」

第三話（後書き）

眠いです。おやすみ

第四話（前書き）

いつも通り短いですが、今日は塾なんで、もう一話更新はしないかも。

じゃ、どうぞ～

第四話

「「待て！」」

「待て！と言われたら、待ってあげるが世の情け。歪雲！」

「束さんだよ☆」

「ち、千冬でニャース？」

何をしているかと言うと、宅配中であり、逃走中である。
束はある日、ＩＳを配布する事を発表した。配布日で揉めたが、各国の交渉で決定。ＩＳと束の無罪は交換条件で、もうじき逃げる必要はどの国でも無くなる。

俺らはドイツにＩＳを渡しに来た。
だがそこで黒ウサギ隊？に見つかり、追いかけっこが始まった。途中で偶然居たちーちゃんを巻き込み、今に至る。

ところで、相手方は軍用車、こちらはニンジン＆ａｍｐ；徒歩（※使徒クオリティ）。
時速２００ｋｍはお互い出ていた。そして突然俺が停止。
つまり、

「きゃっ――」

バキャッ！

車がA・T・フィールドに衝突する。

車からは黒煙がモクモクと…。

「あるぇ？もしかして殺っちった？」

…人が出てこないね！

さて、人を殺すと面倒だ。助けよう。

「ったく、勝手に追いかけて勝手に死ぬなよ。」

ドアを剥ぎ取り、シートベルトを切断。二人か。脈は…ある。呼吸も…ある。

片方は腹に破片が刺さってるな。

「束ー。」

「医療機器だね？」

「ああ。」

――３０分後

そこには傷など最初からなかったかのような少女の姿が…。

「すごいでしょー！ひーちゃん。」

「うむ。流石天災だ！」

「ＩＳにも積む予定だよー☆」

ああ、確か一夏のＩＳにもそんな機能があったような…。

「うう…。」

少女が身を起こす。

今までは眼帯をしていてわからなかったが、赤と金のオッドアイ。

銀色の髪。

「ラウラ…。」

「ッ！貴様、何故！」

「い、今は話せん。それより、この国はもう俺らを追わないことが決まった筈だぞ。」

「なっ！」

ＩＳコアを全世界に。束の理想とやらに近づくための大きな一歩になるらしい。

「少女、もう一人は車だ。今度からは安全運転を心がけるように。」

「それは貴様が――」

「俺は渚歪雲だ。また会おう。」

少女を見送る。

アレが幼き日のラウラか。なるほど、まだ幼いが可愛い顔をしてい…たッ！？

――脇腹にウサミミが刺さっている。

「ハハハ。ひーちゃん、帰ろ？」

「あ、ああ。」

ちーちゃんと別れ、俺達は旅を再開した。

第四話（後書き）

ラウラと会ってみる回でした。別にフラグではありませんが、なんとなく書いてみたくなってｗｗ
左目を移植する時期とかは覚えていないので、ドイツがＩＳの配布日にあわせて移植したと言うことに。

第五話（前書き）

作者が満足するまで千冬＆ａｍｐ；束のターン！

じゃ、どうぞ～

第五話

俺は今、日本引きこもり協会…げふん。某放送局のスタジオにいる。ＩＳの配布が終わり、改めて自己紹介＋建国の宣言をしに来たのだ。

お、始まった。

「はろー☆私が天才科学者の篠ノ之束さんだよ。」

「テストパイロット、渚歪雲だ。」

「ここ日本に愛の巣「ＩＳだ」国の建国を宣言するよー。」

はぁ。こんなこったろうと――

「あ、ひーちゃんは私のだから、手を出したｒ「カットォォォオ！」」

流石天災、予想の斜め上を行くぜ…。

急きょＣＭに入ったか…。

良い判断だ。

「さ、帰ろ、ひーちゃん。」

「ああ…。」

いつも通り束を抱えて研究所に戻る。ちーちゃんに怒られそうだなぁ…。

「な　ん　だ　あ　れ　は」

「何か悪いことしたかな？ひーちゃん。」

「お前はもう少し周りを…。いや、いい。」

流石のちーちゃんも束を叱るのは諦めたようだ。

「歪雲！」

「俺！？」

「何故止めなかった！」

…どう止めろと。

「だいたい、歪雲を私のなどと羨ましい…。」

「ちーちゃん？」

「〜〜！」

顔を真っ赤にして、今後気をつけろ！と言って研究所を出ていくち

ーちゃん。

…疲れた。

ベッドに倒れ込む。

「ひーちゃんモテモテだね☆」

「そう思うならああいうことは…。」

ムニュ。

「…私もひーちゃんのこと好きなんだよ？」

「……。」

「簡単に負けるつもりはないからね☆」

覆い被さるようにして束が言う。

「ひーちゃん、今日は一緒に寝ていい？」

「ああ。」

第五話（後書き）

束サービス回？

愛の巣（笑）は後のＩＳ学園にする予定。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5368t/

IS 使徒転生

2011年5月28日14時05分発行